

# 事例研究からの仮説構成の可能性

## —シカゴ学派の方法論を中心に—

宝月 誠\*

シカゴ学派の影響を受けた方法論、特に事例研究に関する様々な方法論が展開されている。その主なものとしてブルーナーの自然主義や分析的帰納法、グランディド理論、拡大事例法、さらにベッカーの研究技法などをあげることができる。これらによって事例研究の技術は洗練されたものになったが、科学的探究自体がどのような行為であるのかについての論議は深められたとは思われない。本稿ではこれら方法論を批判的に検討することで、事例研究において重視されている「仮説の構成」に焦点を定めて、仮説を推論するということが何を意味するのか、また仮説の確からしさをどのように考えるのかについて論じたい。検討の基盤としてシカゴ学派社会学の研究と関連のあったミードなどのプラグマティズムの科学方法論に準拠しながら、特に「仮説」は単に「発見」されるものではなくて、「構成」されるものであることを示す。そしてその構成にはプラグマティズムの「行為論」と「アブダクション」が関連することを明らかにする。

キーワード：仮説の構成、事例研究、ミード、プラグマティズム

### はじめに

社会学の方法論上の論議は実証主義からポスト実証主義、反基礎づけ主義の立場に立つ構成主義、さらに認識の立場性を重視する批判理論など多様である (Denzin and Lincoln, 2000; 野家, 2005)。本稿は基本的にプラグマティズムの立場から科学的探究を考える。もちろんプラグマティズムといってもローティ (Roty 1982) のネオ・プラグマティズムのようなポストモダンに近いものもある (Baert, 2005)。本稿は G. H. ミードなどの初期のプラグマティズムの科

学方法論を念頭においている。ミードの科学方法論といっても、それが仮説—検証タイプの自然科学的方法を推奨するものであるとする立場から、再帰的・解釈学的方法とみる見解など解釈は分かれている (徳川, 2006)。しかしミードの方法論に関しては<sup>1)</sup>、少なくとも次の点は同意されると思われる (宝月, 2003)。すなわち、彼の科学方法論の特徴は、日常の行為において見出される問題解決の仕方との連続性において捉えられている点にある。「現存する世界」(the world that is there) において、人々はそれまでの自明のやり方では上手くいかない問題状況や説明できない問題に直面した時に、それらの解決を模索する。解決可能な方策を見出し、それを仮説として明確にし、その仮説を試

\* 立命館大学産業社会学部教授

してみる。そして問題がうまく解決されて行為の遂行が可能となるときに、その仮説は真であると考え。この仮説が真理であるか否かは特定の状況の問題解決に有用であるという点に求められる。日常生活で普段行われているこうした行為は科学的探究の場合でも基本的に同じである。「問題状況」に直面して「解決すべき問題を設定」し、「解決可能な仮説を推論する」こと、さらにその「仮説を検証」し「修正」していくことが科学的行為の中心となる。この一連の過程のなかで問題解決に役立つ何らかの仮説を推論することは、日常生活であれ科学的探究においてであれ重要な点である。こうした推論はいかにして行われるのか、特に科学的探究において仮説の推論としていかなる方法が推奨されてきたのかを検討してみたい。主に取り上げるのは、シカゴ学派（Bulmer, 1984；Harvey, 1987；Abbott, 1999）の流れをくむブルーマーの「自然主義的方法」や「分析的帰納法」「グラウンディド理論」「拡大事例研究」「ベッカーの技法」などである。これらは主に事例研究に関する方法論であるが、事例研究では仮説の発見ないし構成を重視している<sup>2)</sup>、こうした方法を取り上げることは本稿の課題に適している。論議の中心となるのは「仮説の発見」と「仮説の構成」の違いである。前者の立場は事例から一般化や抽象化することで対象に潜む本質やそこに働く普遍的な作用を「発見する」ことが探究の課題になるが、後者の場合は研究者が事例を説明できる確からしい仮説を「推論する」という点が重要となる。

### 1 ブルーマーの自然主義的方法による推論

まず、ミードの方法論の継承者を自認するブ

ルーマーを取り上げる。彼は初期の頃、すなわち1928年の博士論文『社会心理学における方法』やトマスらの『ヨーロッパおよびアメリカにおけるポーランド農民』に対する長文の書評論文（Blumer, 1939）を書いた時期は、意外と実証主義の立場が濃厚である（Baugh, 1990；Hammersley, 1989）。初期には、彼は科学の目的を普遍的な法則を探究するものとみなし、認識に際しての概念の重要性を強調し、さらにデータに関してはその代表性や適合性や信頼性、さらに解釈の妥当性の検証の必要性をあげている。この立場から『ポーランド農民』を批判し、彼らの解釈は興味深くもつともらしいが、データに基づいてその妥当性が検証されているわけではないとする（Blumer, 1939）。

しかしシンボリック相互作用論者を標榜する1960年代になると、ブルーマーは自らの視点に相応しい方法として「自然主義的探究」（naturalistic investigation）を提起する。その主張は、1969年の著書『シンボリック相互作用論』の第1章の論文に集約されている。

（1）まず、自然主義的研究法は経験的世界の「ありのままの進行中の性質」に即してその世界を把握することを主眼とする。そのためには、経験的世界の「シミュレーション」や実験室での人為的な操作のような「実験」、さらに「その世界について事前に設定されたイメージによる代替物」による探究では不充分であるとみる（Blumer, 1969：46 訳59頁）。

自然主義的探究が重視するのは「探査」（exploration）とよばれる方法である。「いかにしてわれわれは、経験的社会的世界の間に接近し、それに深く入り込むことができるのか？」（Blumer, 1969：39-40 訳50頁）ということに尽きる。そのために研究者が馴染んでいな

い未知なる経験的世界と親密な関係を打ち立て、その世界をよく知り、そこから問題を設定したり、探究の方向を模索したり、しかるべきデータを求めたり、分析や解釈の方向を探っていく過程である。

(2)より具体的には、探査の重要な点として次のようなことを指摘する。第1に、研究はあらかじめ決められた課題や固定した方法に従って進められていくのではなく、経験的世界の探究を深めるなかで、「研究の焦点は初めは広いものが、しだいに鋭いものになっていく」ものであって、問題は明確になり、何が適切なデータであるのかを知るようになり、重要な関係性は何かについてのアイデアを生み出し、研究している生活領域についての自分自身の概念を発達させていくことである。

第2に、経験的世界の進行中の姿に接近するためには、倫理的に許される限りいかなる方法も使用する。直接の観察・人々への面接・生活史の収集・書簡や日記の使用・公的記録の検討・グループディスカッション・特定の事項や出来事の頻度のカウントなどの技法を用いることができる。どれを使用するかは「その適切さや実り多さによって」判断されるもので、方法に関してはオープンである。

第3に、研究者は探究過程で経験的世界に関して自らが有するイメージや前提を検証し改訂する必要がある。われわれは対象世界を十分に知らないままに、しばしば自分の馴染みの認識枠組みに従って、それを解釈する。自らの認識枠組みにわれわれは囚われていることをまず自覚し、経験的世界を尊重することが必要である。

第4に、経験的世界の記述に際しては「条件が許す限り包括的で正確な、研究領域について

の像を、十分に描き出す」ことが求められる。そのためには、思弁ではなくて研究領域に精通して「事実」に基づいて語ることである。精通することで、「研究領域に対して発した質問が、有意味かつ適切であること」、「設定された問題が自分ででっちあげたものでないこと」、「自分が探しているデータが経験的世界にてらして重要なものであること」、「自分が従っている基準がその世界に対して誠実なものであること」などを知ることができる。

(3)ブルーマーの強調する方法論のもう一つの要は「精査」(inspection)である。研究者は経験的世界で何がおきているのかを記述するだけでなく、その世界を分析する必要がある。すなわち「自分が立てた問題を理論的な形式に铸造し、類的な関係を取り出し、概念に内包される言及対象を明確にし、理論命題を定立すること」をめざすのである(Blumer, 1969: 43 訳55頁)。ブルーマーによれば「精査」は次のような方法であるという。

第1に、精査は柔軟で、想像力を必要とする創造的な作業となる。すなわち「研究者は、分析上の要素の経験的な実例を取り上げ、それらの様々な異なる現実の状況を眺め、いろいろな角度からそれを見て、それらの類的な性質に関して質問を発し、またそれらに戻って再検討し、それぞれ比較し、このようにして、その経験の実例が代表している分析上の要素の性質をふり分けしていく。このような分析上の要素の固定化は、経験的生活それ自体の吟味を通して行われる」(Blumer, 44-45 訳57頁)。

第2に、精査はあらかじめ固定された方法や操作的な手続きに頼るのではなくて、探究過程のなかで経験の実例の内容を精密化し、洗練することを通じて、「分析上の要素の性質を特定

化」する。

第3に、要素間の関係を取り出すことは社会学の探究において重要なことであるが、この関係は経験的世界のなかで吟味され、取り出されたものでなくてはならない。先行するイメージからアプリアリに構成されたものや恣意的に結びつけられた関係であってはならない。

(4)では、こうしたアプローチは従来の科学的探究とどこが違うのか。ブルーマーによれば、これまでの支配的な科学的探究は、既存の理論ないしモデルを用いて、研究されている領域に固有の問題を設定し、その問題をカテゴリー化し独立変数や従属変数に変換し、集めたデータを用いて変数間の関係を見出し、その関係を説明するために理論を用いる。それに対して、ブルーマーの研究法は経験的世界をまずよく知りその世界に即した問題設定やデータ収集や解釈の方向性の選択を強調する。さらに、経験的世界の実例に即して分析的要素を注意深く取り出す精査を提起する。彼がいう「分析的要素」(analytical element)は「過程や、組織や、関係や、関係のネットワークや、存在の状態や、個人の内部的組織化の要素や、出来事などに言及するもの」であり、具体的には統合・社会移動・同化・カリスマ的指導者・官僚制的関係・権威体系・異議申し立ての抑圧・志気・相対的剥奪等のカテゴリー的な項目である。そして「精査の手続きは、こうした分析上の要素を、その要素が包摂している経験的な実例の注意深く柔軟な吟味によって、細かく入念に検討するということである」(Blumer, 1969: 43-44 訳56頁)。

ブルーマーのいう自然主義的探究の骨子は以上の通りである。彼が経験的世界についての仮説を推論するのに必要なこととして重視したこ

とは、なによりも経験的世界それ自体を熟知することと、その上で分析的な探りを柔軟かつ丹念におこなうことである。この点は重要であり、彼の意義はその重要性を繰り返し強調した点にある。彼は科学的探究が絶えざる創発的な行為として行われることを認識していた点で、まぎれもなくミードの方法論を継承している。しかし、彼のいう「探査」について述べていることは自然主義に共通する方法であり (Van Maanen, 1988)、また推論に関して述べた「精査」もやはり、分析要素の注意深い吟味を指摘するだけにとどまっており、ブルーマーの重視する創発的な経験的世界を把握する方法としては内容に乏しい。しかも、研究者の視点や理論が探究においてどのような役割を果たすのか、理論負荷性のマイナス面は強調しても積極的な面は軽視されている。さらに、彼の方法論は仮説の検証は経験的世界との一致ということが重視されるだけで、素朴なリアリズムの「真理対応説」にとどまっており、新たな仮説が問題解決に役立つかどうかで、その有用性で仮説を判断するミードなどのプラグマティズムの立場とは異なる。

## 2 分析的帰納法による推論

ブルーマーの素朴な自然主義よりはるか以前に、ズナニエツキは『社会学の方法』(1934)でより洗練された「分析的帰納法」の考えを明らかにしている。それは「列举的帰納」と対比されるもので、列举的帰納が多くの実例のなかに類似した性格を探し出してそれをその一般性のゆえに抽象化するのに対して、「分析的帰納」は所与の具体的な事例から、本質的な性格を抽出して、それを一般化し、本質的である限りそ

これらの性格は多くの事例においても類似しているに違いないと推定する (Znaniecki, 1934: 訳211)。ズナニエツキにとって「本質」とは「それが何であるのかを決定するような特性」(訳212) のことであり、そうした本質的な特性は「同じ種類の事例全体に共通」(訳212) したものであり、他の構成要素に対して支配的要素となるものである。「本質」という概念は誤解を生みやすいが、彼のいう意味は現象を構成するうえで必要条件ということである。彼は支配的な構成的要素ないし必要条件を探し出すために、「常にいくつかの事例を徹底的に [比較] 分析することによって確認されるべきである」(訳237) という。たとえば、ローマ・カトリックの教区は特定地域にどのようにして根を張るのか。それは教会から派遣された僧侶が制度的権威に基づいて、既存の教会の下部組織をモデルにして、地域の多くの住民に接触し、彼らの反応を受け止め、彼らを集合的行為の社会的単位にまとめあげることによってである。組織化の鍵は地域の住民が権威を受け入れる意志があるか否かに関する集合意志に依存している。この教区の実例から集団形成の本質を抽象した仮説を示すならば、「支配的な権威の制度をもつあらゆる集団では、この制度は集合意志に依存している」と定式化できる。こうした仮説がはたして妥当か否かを確認するには、他の事例との比較が必要となる。支配的な権威を有する集団の比較事例として、労働同盟や愛国団体、政党などが組合や分会、支部を組織化していく場合にあってはめて、その仮説が検証されたならば、一般性の高い命題として承認されることになる。

ズナニエツキの分析的帰納法はその後修正されて、リンドスミスの麻薬常習者 (Lindesmith,

1947)、D. R. クレッシーの横領犯 (Cressey, 1953)、ベッカーのマリファナ使用者 (Becker, 1963) の研究に継承されていく。変更された点は異質な文脈にある事例の比較より事例の同質性を確保することと、否定的事例が重視される点である。

(1)まず、取り上げている事例が果たして同一のカテゴリーに属するものとみなすことが可能かどうかを吟味することが重視される。異なるカテゴリーに属する事例をいくら比較してみても、そこから本質的な特性を見出すことは、困難であるとの考えによるものである。これはクレッシーが横領犯の研究で直面した問題である (Cressey, 1953)。彼は横領犯を研究するために刑務所に収容されている者を対象に選んだ。横領は密かに行われている行為であるので、一人の横領犯から別の横領犯を雪だるま式に紹介してもらうわけにはいかない。紹介してもらえ可能性の高い麻薬常習者の研究とのちがいである。クレッシーはやむを得ずまとまった数の横領犯を得るために刑務所に収容されている者を対象とする。だが、刑務所に収容されている横領犯だけを対象とすると、捕まらないでいるより巧妙な横領犯はサンプルから抜け落ちることにならないのかという懸念が生じる。それに対して、横領は遅かれ早かれ発覚する行為であるので、両者のサンプルの間には大きな差異はないと彼は考える。問題は別のところにある。刑務所に横領の罪で収容されている者の行為をよく調べてみると、横領に該当すると思われるケースであっても横領以外の罪で服役していたり、横領に該当しない行為にもかかわらず横領の罪が着せられているケースもある。法律的に横領犯とされている者でも、行為の面では決して同質の行為ではないのが実情である。検察官

は法律上の犯罪要件を考慮して有罪にしやすい罪状で起訴することがあるが、定義的には横領犯とみなされる者も「受託者による窃盗罪」「信用詐欺罪」「文章偽造罪」など別の罪状で有罪とされ、収容されているものが含まれている。そのために、研究対象を選ぶ際に刑務所の書類に基づいて横領犯を機械的に選ぶことはできない。他の罪状で収容されている者も含めて、研究しようとする行為がどのようなものであるのかについて、その範囲とそれに相応しいカテゴリーを慎重に吟味する必要がある。

横領の定義に一致すると思われる対象を集めていくうちに、クレッシーはその中でも2つのタイプがあることに気付く。ひとつはまじめに仕事をするつもりでその職に就いたが、お金に困って、職場のお金を使い込んでしまったというケースである。もうひとつは最初から金を盗むつもりで金融機関にポストを得たプロの横領犯である。両者は行為の上では職場の金をくすねる点では同じであるが、動機や罪の意識は異なっている。クレッシーは対象の同質性を確保するために、サンプルを前者に限定する。こうして彼が最終的に研究対象としたサンプルは、「まじめに働くつもりで就いた金融信託の地位を侵害する」という定義に該当する行為を行った者である。この定義からはずれるサンプルは彼の分析からは排除される。

(2)対象が明確になったら、次は当該行為の遂行を可能にする要件は何であるのかを特定化する作業である。クレッシーは暫定的な仮説を立て、各事例に照らし合わせるだけでなく、積極的に反証するような事例を見出そうとする。クレッシーの最初の仮説は、「職務経験を積むなかで、金融信託違反は違法なことというよりも、単にテクニカルな違反に過ぎないとみなす

職場の暗黙の定義を学習した結果、金融信託違反は生じる」というものである。この仮説は対象者とのインタビューから、彼らは自分の行為を違法で、間違った行為であることを知っていることが判明して破棄される。第2の仮説は、「金融信託違反を犯す人は緊急を要する財政上の問題に直面しており、その問題を合法的には解決できない場合である」というものである。この仮説は魅力的であるが、違反者の中に緊急性を要しない者や雇用者から被った差別や低賃金への反抗としてそうした行為を行ったという者も含まれているので、この仮説も修正される。第3の仮説は、緊急性から心理的な孤立に重点を移して定式化される。「社会的に公認されないとされる金銭上の責務を負い、個人的に密かに対処しなければならないと感じている人が金融信託違反を犯す」と仮定する。この仮説も過去の借金に対して金銭的責務を目下感じていない人でも違反を犯す事例が出てきて、やはり修正が必要となる。先の仮説の「金銭的責務」部分はより一般化され、次の仮説では「だれとも共有できない問題」と修正され、さらに単に借金に責任を感じているか否かではなく、目下収入と支出の不均衡のゆえに問題に直面していると感じているのかどうかということがクローズアップされる。しかし、こうした問題に直面したからといって、だれでもが金融信託違反を犯すわけではない。それをするにはさらに違反を犯すことによって、そうした問題が解決されるであろうことを知覚しており、実行するだけの技術を身につけていなければならない。さらにこれらに加えて、実際に行為するには、自分の違反に対する道徳的な罪の意識を緩和する工夫も、行為者に必要となる。

かくて、クレッシーが最終的に到達した仮説

は次のものである。すなわち、金融信託違反を犯すようになるのは、第1に他の人とは容易に相談できない金銭上の問題を抱えている人が、第2に自分の現在の職業上の立場を利用すれば金を密かに手に入れることが可能であることを自覚し、第3にそれを実行する際に、自分は盗みをしているのではなくて、しばらく借りておくだけだと自らの行為を合理化する場合である。銀行員など信用が重視される地位にある者はギャンブルで借金して返済に困っていても容易に同僚や家族に相談できない。他者と共有できない問題の手軽な解決法として、職場のお金に手を出し、それをしばらく「借金」しているだけだと合理化する。「金融信託違反」のカテゴリーに該当する全ての行為にはこうした状況と意味づけが見出されることを、クレッシーは明らかにしたのである。

以上のような方法が分析的帰納法であるが、そこで重視されている点は研究対象の範囲を明確にし、それに的確なカテゴリーを与えることと、否定的事例を用いて問題状況を説明する仮説を検証し、もっとも妥当な仮説を構成していくことである。こうした方法はデータから仮説を推論する一つのやり方を示したもので、ブルマーの方法よりはるかに具体的である。

もちろんこの方法に問題がないわけではない。第1は分析的帰納法で得られた仮定は必要な条件であっても十分条件ではないという批判である。これは古くはロビンソン（Robinson, 1951）によってなされた批判であるが、否定的事例がなくなるまで普遍的な原因を探究したからといって、その特定された原因があれば常に一定の結果が生じるとは限らない。原因が作用しても一定の結果が生じないこともあるので、結果の生じた事例だけでなく、原因があつて

も結果の生じなかった事例と比較をしなければ、その原因は必要条件であっても十分条件とはいえない。この種の批判に対して、分析的帰納法は決定論的な説明でも、特定の原因があれば何割の比率でこの結果が生じるのかを確率論的に説明するものでもなくて、必要な要件が何かを明確にするものだと答えるしかない。

第2の問題は、同質性のみ重視してカテゴリーに属さないものを研究から排除していくと、厳密であっても広がりやを欠く研究となる点である。先のクレッシーの研究でいえば、最初から横領目的で金融信託の地位に就く者は対象から除かれる。しかし、すべての横領犯を理解しようとする場合には、彼らの行為も含めて研究する幅広さが必要である。ベッカーはこの点にも自覚的である。彼はマリファナ使用者の研究において、対象としたのは「楽しみのためにマリファナを使用する者の行為」であり、常用者のなかにはこのカテゴリーに属さない者もいる。それはミュージシャンなどプロの音楽家に見出されるタイプで、マリファナを仲間がみんな吸っているので自分も吸っているだけで、マリファナを吸うことに楽しみを感じているわけではなく、彼らのサブカルチャーに従っているだけである。こうしたタイプのマリファナ使用者は仲間集団の圧力による行為とみれば理解可能である（Becker, 1998: 205）。結局、常習的なマリファナ使用者には2つのタイプがあるのであつて、片方だけを見ては「マリファナ使用者」全体を説明したことにはならないのである。

以上のような問題点に自覚的であれば、分析的帰納法は仮説の推論に一定の威力を発揮する。問題状況を解決する仮説を立ててそれを次々と検証していくことは、ミードの方法論と

共通している。ただ、否定的な事例によって仮説を検証することをポパー的な意味での反証可能性にとどめるならば、ミードの方法論の重要な側面を見逃すことになる。彼の方法論では、日常生活状況と同様に研究者と研究対象者、さらに研究者相互の間で相互に他者の態度の取得が行われ、それぞれの立場のパースペクティブが交差し、そうした相互作用を通じて新たな問題やその解決策、相互承認、さらに実践による社会的検証などが生じてくるとみる。こうした一連の探究行為は創発性を伴うものであるが、分析的帰納法はそうした研究法の捉え方は弱く、否定的事例は仮説をエラボレートする試業に過ぎない。

この点では一見厳密性は増したが、科学方法を行為の創発過程として認識したブルーマーよりも後退している。

### 3 グラウンディド理論による推論

シカゴ学派とコロンビア学派の混合とでもいべき方法論がストラウスとグレイザー (Glaser and Strauss, 1967) によって生み出された。それはグラウンディド理論と称せられ、仮説の検証よりもいかにして仮説を「発見する」のかに重点を置いている。主著『グラウンディド理論の発見』(1967, 邦訳『データ対話型理論の発見』)において展開された方法論は以下のようなものである<sup>3)</sup>。

(1)グラウンディド理論が目指すのはその名前が示すように、データに密着しながら理論を構築することである。研究の基盤はデータにあり、抽象的な社会についての既存の概念枠組みに依存するものではない。まずデータが集められ、データはコード化されることによってカテ

ゴリーが生み出され、さらにカテゴリーに基づいて仮説(カテゴリー間の一般化された関係を特定化したもの)が生み出され、その仮説が理論的説明としてどこまで有効かが検証される。ただし、こうした作業が段階を踏んで順番に行われるわけではない。「データの収集」「コード化」「仮説・理論の産出」の作業は絶えず並行して、同時的に行われる。こうした方法は「絶えざる比較法」とよばれる。

(2)「データの収集」は研究の当初はもとよりその途中、さらにカテゴリーや仮説が生み出されてきた段階でも絶えず行われている。データはあらゆる種類のものを集めることが推奨される。特にデータ収集で重要な点は「理論的サンプリング」とよばれる技法である。豊富なデータに接し、データを分析(コード化)しているうちに、カテゴリーや仮説が浮かび上がってくるが、そうしたアイデアを展開するためにはさらにどのようなデータを収集する必要があるのかを判断しなければならない。こうした「理論的サンプリング」とよばれる技法を絶えず自覚的に行うことで、あらゆる可能なデータを比較し、カテゴリーの特性や仮説がどのような条件で変化するのかを掘り下げていくことが可能となる。例えば、彼らは病棟など特定の集団の研究において研究者は避けがたい死の状態にある患者と看護者との間でなされるデリケートな相互作用状況の特性を、「意識文脈」としてカテゴリー化する (Glaser and Strauss, 1965)。さらにこうした文脈が他の病棟やそれ以外の状況(家庭や老人ホーム、事故直後の街頭)と比較することで、カテゴリーの特性の広がりや理論レベルの一般性を確認することができる。

(3)コード化はフィールドやインタビュー、文章・統計資料などから得た多様なデータを研究

者が丹念に読み、そこから浮かび上がってきたことからの確かなカテゴリーを与え、意味づける作業である。質問票に基づく統計調査のようにコードがあらかじめ用意されている研究と違い、どのようにデータをコード化するかということは、研究者の経験や技量によるところが大きい。『グラウンディド理論の発見』ではグレイザーとストラウスはデータからコードを生み出す技法については、あまり詳しくは述べていない。もう少し詳しいコード化はストラウスとコービン (Strauss and Corbin, 1990) によって展開されている。ただしそこで述べられている「オープン・コード化」はごく一般的な内容で、それを読めば確かなカテゴリーを産出できるわけではない<sup>4)</sup>。むしろ、『死のアウェアネス』(Glaser and Struss, 1965) に基づいて『グラウンディド理論の発見』に紹介されている事例、すなわち死期に近付いている患者の「社会的喪失」というカテゴリーの産出の方がわかりやすい。それは看護婦の一連の発話（「彼はあんなに若かったのに」「子供たちや夫は彼女なしでどうやって行くのだろう」等々）に注目することから得られたものである。そして、コード化に必要なことは「ただ余白にカテゴリーを書き留めておくこと」(Glaser and Srtauss, 1967: 訳150頁)であり、さらにそうしたカテゴリーの「背景をなしている比較集団に関する情報を確保すること」(同訳151頁)である。

(4)仮説・理論の推論：データから浮かび上がってきたカテゴリーは通常いくつかの特性で記述されるものであるが、そこから分析を深めるには、まず中心となる特性がなにであるのかを見出すことである。関連した出来事を比較していくことで、こうした関係や特徴的な特性が見えてくる。たとえば先の「社会的喪失」のカテ

ゴリーにおいては、その喪失尺度として看護婦たちは年齢を一番重視していること、中年の患者同士の場合には学歴が重視されることが明らかになる。そして看護婦たちが患者の「社会的喪失度」の評価を行っていることが分かってくると、次には彼女たちが患者のケアをする際にもちいるこまごまとした戦略の意味もわかり、「社会的喪失度」の高い患者が亡くなった場合のショックを緩和させるためにもちいられる「喪失正当化」の言説の役割も明確になる(同訳157)。

さらに、データから浮かび上がってきたカテゴリーは多数に及ぶことがあるが、それらの中から「社会的喪失」のような意味のありそうなカテゴリーだけを残して、余分なデータを「圧縮」する作業も必要となる。それほど必要でないカテゴリーかどうかは絶えざる比較を行う中で分かってくる。そうなれば、重要なカテゴリーに焦点を定めた「理論的サンプリング」を行うことで、そのカテゴリーの範囲をひろげていくことができる。そのカテゴリーが及ぶ範囲が限定づけられることで、カテゴリーとしての一般性の範囲が明確になる。先の「社会的喪失」のカテゴリーは病院だけではなくあらゆるヒューマンサービスの配分にかかわる組織にも見出されることが「理論的サンプリング」を通じて明らかになれば、「社会的喪失」を核にした仮説に自信を持つことができる。

そしてこれ以上、絶えざる比較を行っても新たなカテゴリーは見出されない、さらに「理論的サンプリング」も進みカテゴリーや仮説の及ぶ範囲も明確になったと思われるときがくる。それがカテゴリーの「理論的飽和」とよばれる段階である。この段階に到達した時点で、ひとつの理論として発表することになる、と彼らは

いう。

以上が、グラウンディド理論の骨子である。グラウンディド理論と先に紹介した分析的帰納法との違いについて、後者は研究対象とするサンプルを厳密に定義してその特性の記述と分析を行い、それ以外の対象は排除されるのに対して、前者は比較対象としてのサンプルを分析対象に絶えず組み込んでいくことで、カテゴリーや理論の範囲を拡大して、その適用範囲を明確にしようとするものである（同訳71頁）。そして、分析的帰納法のような厳密な定義にかなうもののみを研究対象とするには、ある集団群と別の集団群が「共通した特徴を十分」備えているのか、逆にある集団群を「根本的な相違」を有するものとして排除することになるが、「何が一定に保たれ、何が一定に保たれていないのかは、実際のところ決してわかりはしない」のであるから、そうした区別は不可能であるとみる（同訳71頁）。確かに対象を厳密に絞りたいが、分析的帰納法に対して、グラウンディド理論はオープンであり、比較を通じて幅広いデータからカテゴリーを柔軟に探り、その適用範囲比較を通じて見定めていくことができる。ただし、厳密な分析的帰納法はリンドスミスやクレッシェーが重視したもので、創始者のズナニエツキはそうした点にはこだわっていないし、ベッカーも厳密さがもたらす弊害について先に指摘したように自覚している。

それよりも両方法の違いは仮説産出の仕方にあるといえる。グラウンディド理論の場合は、仮説はデータのコード化、絶えざる比較の作業を通じて浮かびあがってくるものであり、コード化が重要な方法である。分析的帰納法はコード化についての論議に欠ける。グレイザーらはコード化の具体的な手順までマニュアル化したわ

けではないが、仮説の推論にとってコード化の意義を強調している。もちろん、コード化すれば仮説が自動的に生み出されると考えているわけではなく、比較や柔軟な思考は必要であるし、何よりもデータから説明に値する出来事を読み取るセンスとそれをいかに説明するかの理論的洞察力が必要である。グレイザーとストラウスは死にいく患者の「意識文脈」や「社会的喪失」に関する仮説を示している。それらがどれだけユニークなものかと問われれば、データに裏付けられている点は高く評価しても、意外性を感じる人は比較的少ないと思われる。データに密着してコード化すれば、興味深い仮説を推論できると過信することは危険である。

さらにグラウンディド理論はブルーマーや分析的帰納法に比べてより一段と素朴実証主義的である。データからの推測を過度に重視して認識の理論負荷性はほとんど考慮されていない。また、科学的規準に関しても客観性や妥当性、信頼性など実証主義を踏襲しており、ミードなどの可誤主義とは距離がある。グラウンディド理論には、実証主義でも相対主義でもない、それら乗り越えようとするミードの方法論のような関心は希薄で、実証主義に軸足を置いている。

#### 4 拡大事例法の視点

プロヴォイはシカゴ学派のみならず人類学のマンチェスター学派から影響を受けていると自ら述べている（Burawoy, 2000）。彼は初期の頃のシカゴ郊外の農機具などを製造している工場での機械工としての参与観察（Burawoy, 1979）、アフリカのザンビヤの銅鉱山会社での人事担当の一職員としての参与観察をはじめ

(Burawoy, 1972), 近年では社会主義の崩壊した東欧諸国の工場の資本主義化の様相のフィールドワーク (Burawoy and Verdery, 1999) をおこなってきた。彼は自らの研究法を「拡大事例法」とよぶ (Burawoy, ; 1998 ; 2009)。彼の「拡大事例研究」はフィールドワークに基づいてなされるが、特定の地域の研究にとどまるものではなくて、事例をより広い社会的文脈に位置づけ、既存の理論の再構成を目指すものである。さらに、被調査者への調査者からの影響の回避 (reactivity) や信頼性 (reliability), 再現可能性 (replicability), 代表制 (representativeness) などをいわゆる 4R を重視する従来の「実証主義」とは異なる「再帰的科学」(reflexive science) の考え方が彼の「拡大事例法」の支柱となっている<sup>5)</sup>。彼の「拡大事例法」において仮説の推論がどのようになされるのかについて、事例に即して述べられている論文 (Burawoy, ; 1998) を紹介したい。彼は独立後のザンビア社会を次のように記述し、分析する。

イギリスの植民地支配から独立 (1963年) を勝ち取ったザンビアは、それまでの白人の支配に代わってザンビア人による社会の管理や運営、ザンビア化 (Zambianization) を推進する。同国の主力産業である銅鉱山企業も、白人の経営者・監督はザンビア人にとって代わられる。しかし、白人の後を継いだザンビア人監督は先任者に比べて弱い権限しか与えられていない。彼のもとで働く労働者たちは後継監督を先任者よりも権限が弱くまた能力も劣るとみなし、支持や信任を寄せることはない。監督は、先任者の支持を当てにできずまたそのつもりもないので、より権威主義的な規則に頼って命令するようになる。そのことが労働者の監督への不信をさらに高め、先任の白人よりももったちが悪

く、専制的支配を再現しようとしているとみなして協力しなくなる。一方、白人はすべて会社からいなくなったわけではない。彼らの一部は会社の運営を円滑にするために顧問として残っており、一定の責任や権限を依然として有している。その結果、会社には新たな権力体制 (regime of power) ができあがる。ザンビア人監督とザンビア人労働者は直接対峙し、その背後で依然として白人は権力を握っている。ザンビア人への資源や権威の委譲によって権力構造は表面的に変ったが、権力体制はかえって緊張をはらむものとなった。

次に、銅鉱山会社の状況は独立したザンビア国家のマクロな社会状況と切り離しては理解できない。独立後のザンビアの政治エリートたちは銅鉱山会社を国有化する。鉱山以外にめぼしい産業のない国家において、会社は財政基盤を支える唯一の財源であり、また国有化は、ザンビア人の独立の象徴でもあった。鉱山会社は政治エリートの上からの改革を押し付けられ、同じ肌色の支配者の下で労働者は厳しい労働環境におかれる。政治的安定のため「アフリカ人の向上」を漸進的に進める圧力を鉱山経営者やロンドンの統治者から受けていた植民地時代の政府はアフリカ人労働者の不満を多少とも解消しようとしたが、ポストコロニアルの社会はかえって抑圧を招く皮肉な結果となる。

さらにザンビアの政治エリートの行為は、マクロな国際的な力 (international forces) の文脈で捉える必要があるとプロヴォイはいう。彼らは階級構造を隠蔽し、自らの失政を国民の目からそらせるために、国際的圧力の存在をアピールする。彼らは自分たちの力の及ばない国際的外圧である貿易や銅の価格、西欧の専門家、国際企業を前にして、自分たちがいかに非力で

あるかを国民に訴え、統治者の責任を回避したのである。

以上のように記述される事例は理論的にどのように説明されるのか。プロヴォイはグルドナーの「経営の推移に対する組織的反響」(organizational reverberations of a managerial succession)の理論を活用する。グルドナーの研究は、産業組織が温情的な人間関係を中心とした経営から、能率を重視する官僚制的経営への「自然な」推移のケースを分析したものであるが、ザンビアのケースは上からの押しつけと下からの抵抗の抗争を通じて進行する「強制的推移」である。さらに、彼の研究は独立後のザンビア社会の生産力の低い原因を、非熟練で無気力、怠惰な労働者の資質に求める理論を否定する。それに代わる理論として彼が準拠したのはフランツ・ファノンの「ポストコロニアルの革命理論」である。独立後のザンビアの姿はファノンが描いた国家ブルジョアジーと知識人、農民のそれぞれの階級利害に分裂している社会と同じであり、多国籍企業や鉱山労働者、ザンビア人監督、残留白人などの利害対立が交差する階級社会として説明することができる。

以上のように、プロヴォイの「拡大事例法」は参与観察に基づく特定の事例を、それを取り巻くマクロな社会状況にむすびつけて、その社会の特徴を記述し、さらに既存の理論を活用・修正しながら、その社会に見出される特徴を説明する方法である。彼は自らの方法の限界や問題点も明確に自覚している (Burawoy, 1998: 22-24)。彼によれば参与観察をする以上、利害を異にする当事者たちの「どちらの立場に立つ」のかによって、当事者たちに支配的な影響を及ぼしたり逆に及ぼされることは避けがたいとみる。さらに、社会生活のいろいろな状況で

起こっていることからひとつの社会過程を読み取る時に、そこから当然抜け落ちる人々の声もあり、一部の立場に「沈黙」するバイアスを伴うことも指摘する。また、直接観察しているフィールドを越えて、外部から作用する社会力を想定することは、そうした力を「物象化」(objectification)する恐れもある。あるいは、理論と経験的世界とを対話させる際にも、下手をすれば複雑な状況を理論にあわせて記述したり、異常なケースを無視してしまう「ノーマライゼーション」も起こる。

だが、こうした懸念はあっても、彼は一部のポストモダンの論者のように科学研究の可能性を放棄せず、またグラウンディド理論のように仮説の構成をデータ化からの推論にもっぱら依存するものでもない。彼にとって事例研究は既存理論を試し、修正する経験の場であり、さらにグラウンディド理論のようにマイクロレベルの仮説にとどまることもない。

もちろん、こうした方法は中途半端に行われると、事例の独自性が見失われたり、既存の理論に頼るあまり新規な仮説を見出すこともないままに研究を終えることも考えられる。さらにプロヴォイは政治的権力や階級構造、国際関係に目を向けても、文化に関する視点はないと批判される。権力などの構造上の問題を人々が認識したり逆に問題化を回避するのは、シンボルやコミュニケーションを通してであるので、こうした要素を欠く理論的説明は不完全であるというわけである。プロヴォイが文化に注目していれば、もつと別なザンビア化の仮説を見出せた可能性があったかもしれない。

しかし、拡大事例法は素朴な実証主義や相対主義を乗り越えるために、再帰性の視点から従来の実証主義的方法と異なった方法を提唱して

いる点は注目に値する。研究対象への積極的な働きかけ(介入)を重視し、また状況は各自によってさまざまな意味を有する現実に対しては、従来の実証主義が意味の多様性を回避するために、質問項目を標準化し、回答をチェックリストによって判別しようとしたのとは別の対応をとる。彼は多様な回答者とともにいろいろな場・時を過ごし、活動をともにすることで、具体的な状況における彼や彼女らの経験や「状況知」、語りを解読しようとする。ただし再帰的科学はこうした多様な経験の理解にとどまるのではなく、それらを集めて何らかの意味のある社会過程(social process)に集約する必要があると考える。この社会過程を見出すには既存の理論を活用してなされるのが普通であり、個々の経験は理論やその再構成によって特定の社会過程に集約されていくとみる。また、フィールドワークはローカルな状況で行われるが、その状況は外部の社会力(social forces)の影響と無関係ではあり得ないので、社会力との関連で状況や社会過程を理解することも重視する。彼は研究者が立てた問題とそれに回答する何らかの仮説を一方的に見出そうとするのではなく、研究対象者の世界へのアクティブな参与観察と他の研究者の理論的視点の取得によって、それぞれのパースペクティブを交差させ、そこからあらたな理論を模索している。

## 5 ベッカーの社会学の技法

ベッカーについては分析的帰納法のところで取り上げたが、自らの方法論をより体系的に論じたものとして、『社会学の技法』(*Tricks of the Trade*, 1998)を無視するわけにはいかない。同書は彼の師ヒューズやブルーマーの方法

を継承しながら自らの豊富なフィールド経験を踏まえて展開されたもので、シカゴ学派の方法論のひとつの結実を示すものである。「心象」「サンプリング」「概念」「分析の論理」について、興味深い事例を巧みに用いながらそれぞれの技法が展開されている。

ベッカーの方法論の特徴は、第1に研究者の認識枠組みを自覚的に取り上げている点である。こうした認識枠組みを彼は科学的な「心象」とよぶ。社会学的な心象として「帰無仮説法」「偶然の一致」「機械としての社会」「有機体としての社会」「物語」「因果」が挙げられる。彼のいう「帰無仮説法」とは研究対象とする現象がもしランダムに生じるものだと仮定してみたらどのようなことになるのかとか、一見したところクレージーに思われる現象を何もクレージーなことではないと考えることで、それまでに気付かなかったことを容易に見抜く技法である。「偶然の一致」は出来事の生起を全くランダムに生じるものでも、逆に完全に法則や運命によって決定されたものでもなくて、出来事は条件依存的に進行するものであるという視点で考える技法である。「機械としての社会」は現象を捉える際には、機械の部品が他の部品と関係して作動するように、他のものとの関係や全体の連関を見落としては、社会の作動を見誤るということである。それに対して「有機体としての社会」は社会に存在する現象は互いに有機的に連関しているのみならず、それらは特定の状況で反応し、共同で活動するものであり、それらの活動は特定の場所・空間で行われることを常に念頭におく必要があるということである。「物語」(ナラティブ)はある出来事がどのようにしてそのようになったのかについてのストーリーを構築することである。「なぜ」とい

う問いよりも「いかにして」そうした行為が可能であったのかについての説明を重ねることで物語はひとつの帰結に至る過程を明らかにできる。「因果」は社会学では変数分析として一般に馴染み深い方法であるが、因果分析に伴う問題点（たとえば他変数を一定とすることである変数の影響を評価する方法が多元因果作用の現実を無視する点など）を考慮して、ベッカー自身は因果分析の活用には慎重さを求めている。

第2に、ベッカーは個々のデータの慎重な吟味を求める点では、ブルーマーやグラウンディド理論と共通している。計量的方法と違って母集団と同質の一定のサンプルを抽出することよりも、彼は対象とする現象についての全体の変異（variation）を重視する（したがって奇妙な事例にも注目して事例全体を見渡す）。また、対象をすぐに要約したり解釈するのではなく、綿密で詳細な記述を行う。さらに常識や既存のカテゴリーに頼ってデータを安易に解釈したり、組織の中核部の人たちからの情報だけに依存したり、安易に瑣末な出来事とみなして特定の理論の観点からは意義のあることを見逃したり、実際には証明されていない価値・前提に基づいて研究に値する事例として対象を選択したり排除したりするが、こうしたことを避けるために研究者は常に事例の全範囲への目配りが必要とみる。

第3に、研究において現象を把握するには「概念」が決定的に重要である。彼にとって概念は論理的な構築物でも理念型でも操作的に定義されるものでもない。それは経験的データとの持続的な対話から生まれるもので、事例から概念は定義され、しかもその定義は適用される事例の全範囲を包含する一般性をもとめられる。この点でベッカーはブルーマーを踏襲している

し、グラウンディド理論とも同じである。

ただ、ベッカーがデータから概念を生み出す技法として示しているものは個性的である。たとえば「ワイトゲンシュタインの技法」とよぶ方法が示される。それはワイトゲンシュタインの『『私が腕をあげるとき、私の腕はあがる』』ことを忘れてはならない。問題は、私が私の腕をあげるという事実から私の腕があがるという事実を引き去れば、何が残るのか、ということなのだ」という一節を受けて展開される技法である。ベッカーは「何かを引き去れば、何が残るのかを考えること」が概念を生み出すときに重要であるという。こうした思考によって出来事や対象の核心的なものを、偶然的・偶発的なものから区別することが可能となるからである。たとえばベッカーの自宅には沢山の絵画や芸術品があるが、彼を「蒐集家」といえるのか。この問いに先の「ワイトゲンシュタインの技法」を当てはめてみると、ベッカーの家に多くの芸術品があるという事実を取り去ってみると、蒐集家の概念化として何が残るのか、ということになる。明らかに、芸術品を多くもっているだけでは「蒐集家」の概念に当てはまらない。「蒐集家」は好みにまかせて雑多な作品を集めるのではなくて、芸術に対する一定の「方向性」をもち、身につけた深い知識と訓練された感覚を備え、具体的で明確な目的や将来への展望を有している。芸術品を単にあれこれと集めているだけでなく、こうした将来性のある作品を蒐集できる者こそ、「蒐集家」の名前にふさわしい人物である。グラウンディド理論のコード化とは一味違うこうした技法が数多く紹介されている<sup>6)</sup>。

第4に、ベッカーはデータ分析に際して「論理」を重視するが、それは単に科学は論理的で

なくてはならない、という自明なことを言うためではない。彼が論理に注目するのには二つの理由がある。ひとつは人々の論議には明示化されない大前提でなされていることが多いので、その前提を探索することで事例にふくまれている意味を読み解くことが可能となること。例えば、「黒人の汗は臭いがきついで、公共の場では黒人を分離すべきだ」と主張する人は、その大前提として「ひどい臭いのする人には分離した公共施設がなければならない」という観念をいっている。そこから経験的に論証されていない小前提である「黒人は実際にひどい臭いがする」ということをあげて、「黒人には分離された施設が必要だ」という差別的な結論に達する。こうした三段論法に隠された大前提がなにであるのかを明らかにすることによって、分析の論理はより明確になるという。さらに、こうした暗黙の大前提を明るみに出すことによって、そうした人々の間の線引きの前提が日常生活のいかなる経験から生み出されているのかについて研究を深めていくことができる。「それは社会学ではない」「それは芸術ではない」というような線引きや日常生活で排除されているもの、例外的とされているものは、ある状況や現象の生成にかかわるより多くのものを発見する可能性をもたらす。

いまひとつは、論理的に可能な組み合わせを考えることによって、データに含まれるあらゆる可能な類型を見落さないようにすることである。ラザーズフェルドの「特性空間分析」やレイガンの「質的比較分析」、「分析的帰納法」があげられており、いずれも真理表を基本にし、論理的に可能な組み合わせをすべて考慮することで、データの変異と多様性を最大限認識しようとするものである。紹介されている技法は特

に新しいものではないが、論理的に対象の変異と多様性を尊重しようとするベッカーの方法がよく示されている。

以上のベッカーの技法は事例研究だけでなく一般的な研究方法として述べられているものであるが、仮説の推論という点に関しては、彼がギアールとカンサス大学医学部でおこなったフィールドワークに基づく研究が興味深い (Becker, Geer, Hughes and Strauss, 1961)。その内容は『社会学の技法』(1998)でも取りあげられている。

ベッカーが内科病棟で参与観察を行っていたときに、多弁で文句の多いある患者について臨床実習中の医学生の一人在「彼女はまぎれもない *crock* だ!」というのを聞きつける。この奇妙な言葉に興味を感じたベッカーはその意味を医学生や医師に尋ねる。彼が興味を感じたのは、医学生たちが特定の患者に *crock* といったカテゴリーを付与し、患者を特別視して、いやな患者として扱っている点である。医学生たちが用いる *crock* という言葉に注目したベッカーは、その言葉が医学生の間で何を意味するのかに興味をいだく。ベッカーがみるところ、それは「さまざまな病状を申し立てるが特に身体に病因が認められない患者」(Becker, 1998: 155)のことを、医学生の間では意味している。医学生たちはこうした患者の担当医になりたがらない。この手の患者は将来医師になってからも出会うことの多い患者であり、医学生がこの手の患者の扱いになれておくことは将来の診療において役立つはずであるが、医学生たちはこの種の患者を避けたがる。

そこで医学生がなぜ敬遠するのかということが次の問いとなる。この問いに答えるのには医学生たちがおかれている状況に目を向ける必要

がある。まず第1に、医学生が医療現場で学びたいと思っていることは本では学ぶことのできない「臨床経験」である。この関心からすれば特段大きな疾患のない *clock* は医学生にとっては無価値な存在である。第2に、医学生は短期間に多くのことを学ばなくてはならずいつも一瞬たりとも時間を無駄にしたがらない。あれこれ文句を言うが、医学的に新しい経験を与えてくれない *clock* は医学生にとっては、貴重な時間の浪費としか思われぬ患者である。第3に、医学の理念が関連している。医学の理念は患者に治療を施し回復させることであるが、特に重度の患者を回復させることは「医学的奇跡」を実践することになる。しかし特に大きな問題のない *clock* では「医学的奇跡」をおこしようがない。この理念は同時に「医学的責任」に関連しており、医療は基本的に他者の身体への侵襲であって責任を伴うものである。しかし、*clock* 相手では何もしようがなく、責任感も希薄になる。

このようにベッカーは *clock* とという言葉を注意深く探査することによって、クロックを回避しようとする医学生たちのおかれた医学教育の現状を明らかにしたのである。医学生たちは、詰め込み主義の医学教育への実践的な対処を迫られたためというのが、ベッカーらの解釈である。ただ、こうした経験はベッカーが研究のなかで出会ったひとつのエピソードであり、それだけを切り取っても意味は何もわからない。彼らの研究は、医学教育の世界に入った若者たちの間で形成される「集合的パースペクティブ」、すなわち同じような問題状況に直面したグループによって生み出される思考や行為様式の変容を明らかにしようとするものである (Becker, et. all, 1961 : 36)。当初医学の理想主義に燃え

ていた新生も厳しいカリキュラムに対応する必要性から、現実主義的な考え方に変わっていく。医学生の考え方や行為様式が変容してく物語が語られるなかで、先の仮説も医学生の行為を説明するものとして意味をもつのである。具体的なエピソードはそれが埋め込まれている組織・医学教育の世界との関連のなかで、言い換えれば個と全体との相互依存の関係のなかでその意味も明確なものとなるのである。

ベッカーの方法論は認識が理論負荷である(かれはそれを「心象」とよぶ)ことを踏まえて展開されているだけでなく、経験的世界の多様性自体への目配りや的確な概念の重要性、あるいは論理の活用、さらに全体の文脈の中で個々の現象の意味を捉えるなど参照すべき点は多い。しかし、彼は事例研究から仮説を一般的な命題として定式化することには慎重である。また、彼の研究は研究者サイドの視点からなされたもので、分析的帰納法の立場を踏襲している。

## 6 事例研究からの推論

これまでシカゴ学派を継承すると思われる5つの方法論を紹介してきた。これらは単なる研究技法としてではなく、科学方法論として評価する必要がある。プラグマティズムの方法論からは、以下のことを指摘できる。

(1)まず、プラグマティズムの科学方法論は行為論として位置づけられる必要がある<sup>7)</sup>。ミードの行為論は次のようなものである。第1に、行為はふだん自明視され、習慣的に遂行されているが、問題状況に直面すると思考を働かせて解決策を模索し、行為の再開を可能にしようとする。第2に、人々は「現存する世界」の下で、

種々の対象や「他者の態度」を取得し、それへの反応として生じる自我や状況の定義に基づいて行為する。経験のうちに「現存する世界」が入り込んでくるのである。第3に、人は過去と未来を現在のパースペクティブと交差させ、それらを止揚して構成したりアリティに基づいて行為を遂行する<sup>8)</sup>。行為の基盤となるリアリティは過去と未来に関連づけられた現在にある。以上のことを簡単にいえばミードの行為論は社会性（同じものが社会的・時間的に異なったシステムに同時に所属することができること）の原理に基づいて、あらたな行為を創発させ、問題解決をはかる過程である、といえる。

科学的探究もこうした行為に変わりはない。ただ科学的探究はより自覚的に明晰な思考を働かせて問題解決に寄与する行為である。まず問題を明確にし、問題を解決するための仮説を模索すること、さらに問題解決に仮説が役立つかどうかを確認することが重要となる。さらに、それは単独でなされる行為ではない。対象世界の関係者や研究者集団、科学知の利用者などの態度の取得を通じて行われる共働活動で、新たな問題や別の仮説あるいは否定的な事例と出会い、異なったパースペクティブが交差するなかで、問題や仮説、検証が構成されていく。

先に取り上げた5つの方法論もこうした過程に照らして評価しなければならない。研究の初期に理論や研究対象の範囲・データを固めてしまうのではなくて、研究遂行の途中でこれらを柔軟に修正していくことが必要なことを、ブルマーをはじめ他の方法論も指摘する。またグラウンディド理論はデータに密着してコード化や解釈を入念に進めなくてはならないことを強調する。さらに研究には概念やカテゴリーは不可欠であるが、それは幅広いデータを吟味し、

データに適したカテゴリーを構成すべきであることをブルマーやベッカー、グレイザーらは強調する。また、データの中でも理論や仮説に反する事例やそれまでの理論では解釈できない事例や奇妙なこと、よくわからないことに出会った時に、それを無視するのではなくて、それら事例を新たな理論や仮説の展開・拡大に結びつけることが強調される。拡大事例法でも、既存の理論の修正で理論を新たに構成していくことの重要性が指摘されている。こうしたことは創発性を重視するプラグマティズの方法論とも一致する点であるが、問題解決のカギとなる仮説の推論はいかにしてなされるのか。

(2)先にあげたベッカーらの研究は *croak* の事例から仮説を推論し、明確に定式化することを避けている。しかし、ハマーズリーも指摘するようにベッカーの研究から特定の仮説を推論することは可能である (Hammersley, 1989: 208)。例えば、「限られた時間の中で必要な経験を少しでも多く積もうとしている者は、そうしたチャンスを与えない相手に対しては冷淡な態度や忌避的な行為をとりやすい」という仮説を構成することができる。

この仮説の構成には一定の推論形式が用いられている。すなわち、アブダクションに基づく推論である。たとえば「こうした状況においては、行為者はいかに行為をするのか」を説明する仮説を推論し、その仮説が確かならば、観察されたことは当然のことと考える。こうした説明仮説を構成することがアブダクションである。演繹的推論が幅を利かせている時代にかにも古臭いと思われるかかもしれないが、仮説を構成するうえでこの推論は重要な役割を果たしている。ただ、事例の確かな説明に仮説がなっているのかどうかを慎重に吟味しなくてはな

らない。

第1は、そうした仮説が「常識」に照らして妥当かどうかという判断である。プラグマティズムでいえばパースの「批判的常識主義」(critical commonsensism)に相当する(Hammersley, 1989: 48)。経験知の蓄積である常識はそれなりに信頼できる有効な知であり、それに照らして仮説を吟味することができるはずである、もちろん「常識」が常に正しいわけではなく、「批判的」というのは疑念が生じない限り有効であるという意味であり、疑念の少ない「常識」的な知との整合性を問うてみることは、仮説の構成において必要なことである。

第2に、ヴェーバーは歴史的な出来事の説明に「一般経験則」を用いており<sup>9)</sup>、さらにフォン・ウリクトも目的行為の説明に「実践的推論」(von Wright, 1971)を活用する。経験則や実践的推論に裏打ちされた仮説は妥当性が認められている。事例に基づいて推論された仮説も、それが「一般経験則」や「実践的推論」に照らして吟味することで、その妥当性をチェックすることができる。特に「一般経験則」は命題や理論として示されていることが多いので、それらと自らの仮説を照合して、よりふさわしい仮説の構成の契機にすることもできる。

だが、アブダクションによる仮説の構成に対して当然疑問符もつけられるので、それらに答えておく必要がある。第1は、アブダクションに頼らなくとも、合理的選択理論やゲーム理論を活用すれば特定の行為を的確に推論することができるという考えである。こうした推論は確かに事例を説明する際に明確な分析道具となる(Bates, et al. 1998; Greif, 2006)。しかし、すべての事例をこうしたモデルに当てはめて分析

できるとは考えられないので、多様な事例から仮説を生み出すことがなによりも現実世界を尊重することになり、それにふさわしい仮説を新規に生み出す機会を広げる。

第2は、行為者が特定の状況にあればいかなる行為をするのかを説明する表層的な仮説を推論するのではなくて、社会の普遍的な「構造」やそれが多様な形態として表出してくる「転換」過程を分析し、それらを支配している規則を定式化するのが科学本来の役割だという見解である。構造主義が目指すこうしたフォーマルな理論が複雑な社会を説明するうえで可能ならばもちろん素晴らしい。しかし、プラグマティズムやシカゴ学派が目指すことは構造主義の方向とは異なり、リアリティは「現存する世界」での人間の生きた経験にあると考える。人々は世界において直面する問題状況を解決するために思考し、新しい行為を切り開き、新しい対象やその意味を生み出し続ける。そうした世界の経験とそれから生起してくる出来事を記述し説明することに、シカゴ学派の研究の主眼はある。

第3は、行為やそれが引き起こす出来事などに関する仮説をあれこれと定式化しても、仮説相互間で体系化されていなければ、科学的な仮説や知とはなりえないのではないのかという批判である。確かに矛盾した仮説をあれこれ並置しておくだけでは、論理的な一貫性を求める科学の立場からは問題がある。論理実証主義者ならばこの事態を改善しようとするだろう。例えばゼッターバーグは、近い関係にある諸命題を縮減する方法を示している。複数の命題のなかから公準となるものを選び、それらの結合から他の命題を導出できるようにする(Zetterberg, 1963: 訳106-109)。あるいは、仮説ないし命題

群を可能な限り整合させ、一貫した命題集の体系を構成しようとする者もいる。その一例はジョナサン・ターナー (Turner, 1988 : 1995) やランドル・コリンズ (Collins, 1975) などの研究である。

だが、シカゴ学派が仮説の構成において意図するのはこれらいずれの立場とも異なる。シカゴ学派は矛盾している仮説間の調整をおこなう必要をあまり感じない。仮説を具体的な事例の文脈から切り離して一般的な仮説として定式化することは、シカゴ学派の主眼とするところではない。仮説は対象についてのストーリーを語っていく際に、その中の出来ごとや展開過程を説明するために用いられるものである。物語全体の文脈のなかでその仮説が意味のある説明になっていれば、他の仮説とたとえ矛盾していても問題はない。具体的な文脈やストーリーを離れた一般的な仮説を構成することはそれほど意味のあることではないと考えるからである。

先のベッカーの事例でいえば、説明を明確にするために仮説を定式化してみることは必要であるが、その仮説は医学校の学生文化の文脈のなかで説明力を発揮すれば意義がある。彼は臨床の場で聞きつけた *croak* という医学生たちが何気なく用いる言葉に疑念を感じ、それが何を意味するのかを医学生との相互作用を通じて探究する。その概念で患者を類別化する理由を医学生の過密なスケジュールや医学生の集合的パースペクティブに関連させて説明する。その結果、ベッカー自身の疑念は解消されただけでなく、医学生たちにもそうした表現を日常的にしている理由が、彼や彼女らの置かれている状況や将来「一般開業医」にふさわしい多様な臨床経験をもつことへの自分たちの渴望が関係していることを理解することになる。医学生たちの

間で見出される仕事量に制限を加えようとする行為は医学校の組織や制度文脈、文化に関連したものであるが (Becker, 1970 : 33-34)、もし他の組織でもみられるとすれば、その仮説はそれなりに検証されたといえる。

もちろん先の仮説は医学生にとっては、いわれてみればそれはその通りだという程度のものでしかないかもしれない。医学生のそうした反応に応えるには、当事者たちに十分有益な知となるまで仮説や物語を入念に構成し続ける必要がある。そのためには、探究は一方向的になされるものではなく、研究対象者の態度の取得を通じて自らの問を問い直し、さらに他の研究者や組織や医学界の関係者との討議を通じて説明の深化を図る絶えざる探究過程に取り組む必要がある。それは実証主義のように「客観性」や「信頼性」、「代表性」などを重視する方法とは異なる。またいわゆる疑似基礎づけ主義者のように、説明の妥当性の規準として、例えば「もつともらしさ」や「真実性」があるのかどうかといったことをもっぱら重視する (Lincoln and Guba, 1985 ; Hammersley, 1992) ものでもない。プラグマティズムの判断規準は、ある段階で示された仮説や説明がその時点の特定の問や疑念を解消するものである限り、それは有用なものであると考える。科学的探究は、問題状況の解決にとって、またそこに働く社会過程を理解するうえで、関係者にどれだけ意味のあるものかという観点から評価されるのである。

## むすび

以上のようなことは、仮説は一般化や抽象化によってデータの精査から「発見」されるものでも、特定の理論から「演繹」されるものでも

なくて、アブダクションから「構成」されるものであるという点を考慮するという点である。ラディカルな構成主義者は、探究はすべて「構築という行為」でありまた「それ自体実践的で道徳的な判断である」と主張するが (Smith and Deemer in Denzin and Lincoln, 2000. 訳3巻279), 本稿はもっと穏やかに科学的探究はプラグマティズムの「行為論」と「アブダクション」に基づく構成過程であるというだけである。「構成」と「発見」との間にそれほど深い意味はないという見解もあるかもしれないが、やはりこの差は無視できない。シカゴ学派の研究の多くは、仮説は単に一般化や抽象化によって「発見される」ものではなくて、プラグマティックな行為論をベースにした探究を通じて説明的仮説を「構成する」ものであるという方法論を実践したものと見える。すでに一部で自覚的になされているように (Abbott, 2001; Ragin and Becker, 1992; 中河, 2005), 方法論の過度なマニュアル化を進める前に、科学的探究の基盤を見つめ直すことも必要である。

## 注

- 1) ミードの科学論の解釈は主に「プラグマティズムの真理理論」(1929)と『19世紀の思想のごき(1936)ヤクック (Cook, 1993: 176-182)に基づいている。彼のプラグマティズムを理解するためには、彼の行為論のなかで捉える必要がある。それに関しては最後の6節で述べる。
  - 2) 事例研究などの定性的研究において仮説の構成より、もっぱら推論の検証を重視する者もいる (King, Koeohane and Verba, 1994)。これに対する批判も強い (Brady and Collier, 2004)。
  - 3) この方法や研究史に関してはすでに日本でも広く紹介され (木下, 1999: ), さらにその改良版も示されている (木下, 2003)。ストラウスとグレイザーの間で方法論をめぐる論争が戦わ
- され、グラウンディド理論をひとつの方法とみなすことができるのか疑問であるかもしれないが、本稿では彼らの原点である『グラウンディド理論の発見』をベースにして述べている。
  - 4) コード化のやりかたとして、木下康仁の修正版 M-GTA (木下, 2003) が参考になる。
  - 5) 「拡大事例研究」だけでなくプロヴォイの幅広い方法論は近著にまとめられている (Burawoy, 2009)。
  - 6) ベッカーが同僚の名前をとって「バーニー・ベックの技法」とよぶものがある。それはデータから概念を生み出す際に、個別の事実を示す特殊な言葉よりは一般的であるが、相互作用やアイデンティティ、合理性といった概念よりもより一般性の低いレベルで、概念を定義する方法である。
  - 7) この点は徳川 (2006: 2004) によって既に指摘されている。ただ、彼は再帰性を重視するあまり方法論は心情主義的傾向を帯びている。
  - 8) ミードの行為論の3要素は加藤 (2003: 2004) で示されており、3要素をミード理論の発展過程のなかで捉えているが、いずれの要素も過度に弁証法に関連付けて理解しようとする傾向がある。
  - 9) ヴェーバーの「一般経験則」に関しては、折原浩 (2007: 93-100) によって歴史的事例を具体的に紹介しながら詳細に説明されているので大変有益である。

## 参考文献

- Abbott, Andrew. 1999. *Department and Discipline*. University of Chicago Press.
- . 2001. *Time Matters: On Theory and Method*. University of Chicago Press.
- Baert, Patrick. 2005. *Philosophy of The Social Sciences: Towards Pragmatism*. Polity.
- Bates, Robert H., Avner Greif, Margaret Levi, Jean-Laurent Posenthal and Barry R. Weingast. 1998. *Analytic Narratives*. Princeton University Press.
- Baugh, Kenneth Jr. 1990. *The Methodology of Herbert Blumer*. Cambridge University.

- Becker, Howard. S. 1963. *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*. Free Press (村上直之『アウトサイダーズ』新泉社, 1978.)
- . 1970. *Sociological Work: Method and Substance*, 1970. Aldine.
- . 1998. *Tricks of the Trade: How to Think about Your Research While You're Doing It*. University of Chicago Press.
- Becker, Howard S., Blanche Geer, Everett C. Hughes, and Anselm L. Strauss. 1961. *Boys in White: Student Culture in Medical School*. Transaction.
- Blumer, Herbert. 1939 (1979). *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America."* Transaction. (桜井厚訳『生活史の社会学』御茶の水書房, 1983所載.)
- . 1969. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Prentice-Hall. (後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房, 1991)
- Brady, Henry E. and David Collier, eds. 2004. *Rethinking Social Inquiry*. (泉川泰博・宮川明聡訳『社会科学の方法論争』勁草書房, 2008.)
- Bulmer, Maritton. 1984. *The Chicago School of Sociology*. The University of Chicago Press.
- Burawoy, Michael. 1998. "The Extended Case Method." *Sociological Theory* 16: 4-33.
- . 2009. *The Extended Case Method*. University of California Press.
- Burawoy, Michael, et.al. 1991. *Ethnography Unbound: Power and Resistance in the Modern Metropolis*. University of California Press.
- Charmaz, Kathy. 2000. "Grounded Theory" in Denzin and Lincoln. eds. *Handbook of Qualitative Research*. Sage. (平山満義監訳『質的研究ハンドブック』2巻, 北大路書房, 2006年第7章「グラウンディード・セオリー: 客観主義的方法と構成主義的方法」所載.)
- Collins Randall. 1975. *Conflict Sociology: Toward an Explanatory Science*. Academic Press.
- Cook, Gary A. 1993. *George Herbert Mead: The Making of a Social Pragmatist*. University of Illinois Press.
- Cressey, Donald R. 1953 (1973). *Other People's Money: A Study of Social Psychology of Embezzlement*. Patterson Smith.
- Denzin, Norman K. and Yvonna S. Lincoln. (2<sup>nd</sup> edition). 2000. *Handbook of Qualitative Research*. (平山満義監訳『質的研究ハンドブック』1〜3巻, 北大路書房, 2005)
- Dewey, John. 1938. *Logic: The Theory of Inquiry*. Henry Holt Company. (魚津郁夫訳「論理学——探究の理論」上山春平編『パース・ジェイムズ・デュエイ』中央公論社, 1968.)
- Glaser, Barney G. and Anselm Strauss. 1967. *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine. (後藤隆ほか訳『データ対話型理論の発見』新曜社, 1996)
- Glaser, Barney G. and Anselm Strauss. 1965. *Awareness of Dying*. Aldine. (木下康仁訳『死のウェアネス理論』と看護』医学書院, 1988.)
- Greif, Avnet. 2006. *Institutions and The Path to The Modern Economy*. Cambridge University Press. (岡崎哲二・神取道宏訳『比較歴史分析』NTT出版, 2009.)
- Hammersley, Martyn. 1989. *The Dilemma of Qualitative Method*. 1989. Routledge.
- . 1992. *What's Wrong with Ethnography?* Routledge.
- Harvey, Lee. 1987. *Myth of the Chicago School of Sociology*. Gower Publishing Company.
- 宝月 誠. 2003 「シカゴ学派社会学と科学方法論」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- 加藤一己, 2003. 「ミードにおける自然, 社会, 科学的方法」, 加藤一己・宝月誠編訳『G. H. ミード: プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房.
- . 2004. 「G. H. ミードの思想形成」, 宝月誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣.
- 木下康仁. 2003. 『グラウンディード・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.
- King, Gary and Robert O. Keohane and Sidney Verba. 1994. *Designing Social Inquiry*. (真淵勝

- 監訳『社会科学のリサーチ・デザイン』勁草書房, 2004.)
- Kiser, E. and M. Hechter. 1991. "The Role of General Theory in Comparative -historical Sociology." *American Journal of Sociology* 97: 1-30.
- Lincoln, Yvonna S and Egon G. Guba. 1985. *Naturalistic Inquiry*. Sage.
- Lindesmith, Alfred R. 1947. *Addiction and Opiates*. Aldine.
- Mead, George Herbert. 1936. *Movements of Thought in the Nineteenth Century*. University of Chicago Press. (魚津郁夫・小柳正弘訳『西洋近代思想——19世紀思想の動き』上・下, 講談社, 1994.)
- Mead, G. H. 1929. "A Pragmatic theory of Truth." *University of California Publications in Philosophy* 11: 65-88. (加藤一己・宝月誠編訳『G. H. ミード: プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房, 2003, 第7章「プラグマティズムの真理理論」に所載.)
- 中河伸俊. 2005. 「『どのように』と『なに』の往還」盛山和夫・ほか『〈社会〉への知/現代社会学の理論と方法』(下) 勁草書房.
- 野家啓一. 2005. 「『実証主義』の時代背景」盛山和夫・ほか『〈社会〉への知/現代社会学の理論と方法』(下) 勁草書房.
- 折原浩. 2007. 『マックス・ヴェーバーにとって社会学とは何か』勁草書房.
- Ragin, Charles C. and Becker, Howard. S. eds. *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry*. Cambridge University Press.
- Robinson, W. S. 1951. "The Logical Structure of Analytic Induction." *American Sociological Review* 16: 812-18.
- Rorty, Richard. 1982. *Consequences of Pragmatism*. The University of Minnesota. (室井尚・ほか訳『哲学の脱構築』御茶の水書房.)
- Smith, John K. and Deborah K. Deemer, 2000. (山尾・徳川訳第11章「相対主義時代における規準の問題」, 平山満義監訳『質的研究ハンドブック』3巻, 北大路書房, 2006年, 所載.)
- Strauss, Anselm and Juliet Corbin. 1990. *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Sage. (南裕子監訳『質的研究の基礎』医学書院, 1999.)
- Schwandt, Thomas. ed. 2007. *The Sage Dictionary of Qualitative Inquiry*. Sage. (伊藤勇・ほか訳『質的研究用語事典』北大路書房, 2009.)
- Thomas, W. I. and F. Znaniecki, 1918-20. *The Polish Peasant in Europe and America*. 5 vols. University of Chicago Press and R. G. Badger.
- 徳川直人. 2006. 『G. H. ミードの社会理論』東北大学出版会.
- . 2004. 「G. H. ミードにおける科学と実践」宝月誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣.
- Turner, Jonathan H. 1988. *A Theory of Social Interaction*. Stanford University Press.
- Van Maanen, John. 1988. *Tales from the Field*. University of Chicago Press. (森川渉訳『フィールドワークの物語』現代書館, 1999.)
- Von Wright, George Henrik. 1971. *Explanation and Understanding*. Cornell University Press. (丸山高司・木岡伸夫訳『説明と理解』産業図書, 1984.)
- Yin, Robert K. 1994. *Case Study Research*. (近藤公彦訳『ケース・スタディの方法』千倉書店, 1996.)
- 米盛裕二. 2007. 『アブダクション』勁草書房.
- Zetterberg, Hans L. 1963. *On Theory and Verification in Sociology*. The Bedminister Press. (安積仰也・金丸由雄訳『社会学的思考法』ミネルヴァ書房, 1973.)
- Znaniecki, Florian. 1934. *The Method of Sociology*. Farrar and Rinehart. (下田直春訳『社会学の方法』新泉社, 1971.)

## A Possibility of Hypothesis Inference in Case-Studies: Rethinking the Method of the Chicago School

HOGETSU Makoto \*

**Abstract:** The Chicago School of Sociology has influenced social inquiry and developed many case-study methods. Its representative approaches are the Naturalistic Approach by Herbert Blumer, Analytic Induction, Grounded Theory, the Extended Case Method and Tricks of the Trade by Howard Becker. These methods have contributed to the elaboration of qualitative research techniques, but these seem not to have deepened philosophical argument in social science inquiries. The purpose of this paper is to review these methods critically and to reconsider how we can infer an accurate hypothesis in a case-study. My philosophical grounding concerning case-studies is based on pragmatism, specifically G.H. Mead's Philosophy of the Act. My assertion is that any hypothesis is not only discovered by careful observation of a concrete case, but also created by a problem-solving act with the imaginative abduction that makes it possible to infer the cross-reference of act and social context. The hypothesis also needs to be embedded in narrative explaining the existing world. The validity of this social inquiry is not judged on scientific standard test but on a criterion of how its hypothesis provides useful suggestions for actors to make sense of social reality.

**Keywords:** inference of hypothesis, case-study, G.H. Mead, pragmatism

---

\*Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University